阿彌陀佛の原語

藤田宏達

一　問題の所在

阿彌陀佛が「無量壽」Amitāyus（偈頌ではAmitāyu）と「無量光」Amitābha という二つの名を持つており、したがつて原語としてこの二つの梵語があることは、改めて言うまでもないところである。ところが、わが國ではこの二つの梵語とは異なつた別の原語を想定する説が提示された。明治四十一年、荻原雲來博士が「微瑟紐（Viṣṇu）と阿彌陀」という論文[1]において創唱されたAmita＜Amṛta 説がそれであつて、その後この説は、諸學者によつて注目を受け、阿彌陀佛を問題にする場合には、必ずといつてよいほど關説されてきたが[2]、しかし未だ十分な檢討が盡くされてきたようには思われぬので、本稿ではこれを取り上げ、その是非を究明することによつて、阿彌陀佛の原語を確認することにしたいと思う。阿彌陀佛の原語は、阿彌陀佛の起源を追究するに先立つて、明らかにされねばならぬ問題と考えられるからである。

二　Amita＜Amṛta 説について

まず、荻原博士の所説を撮要して言うと、次の如くなるであろう。――阿彌陀の原語は、その音の如く解すると、Amida もしくは Amita であつたと考えられる。この場合 Amida は梵語 Amita の俗語と見做されるが、更にこの Amita も俗語と見れば、それは梵語 Amita（無量）のほかに、Amṛta（甘露、不死）にも相當すると見做され、二義を含むことになる。ところで、Amṛta はヴェーダ神話中の Viṣṇu もしくは Soma に關係して言われるものであるから、この點からみて、阿彌陀佛はかかるヴィシュヌ神話より成立したものであろう。――以上の説については、荻原博士みずから「未だ決して確立せる斷案と言ふべからざるも」と述べられているように、なお檢討の餘地があると思われる。わたくしは、當面の原語問題としては、この説には、少なくとも二つの疑問を提出することができると思う。一つは、この説は「阿彌陀」

の原音をAmidaまたはAmitaと想定し、それがそのまま阿彌陀の原語であるという前提に立つているが、これは果して妥當であるか、という疑問であり、他の一つは、Amitaを俗語と見做し、それを梵語Amitaの轉訛とする見方に立つているが、これまた果して妥當であるか、という疑問である。この二つの疑問は嚴密にいえば、言語學的觀點から解決さるべきものであり、したがつてその方面の專門學者の見解を俟たねばならぬが、しかし、次のような檢討を加えることによつて、ある程度の見通しを立てることは、許されるのではないかと思う。

まず、第一の疑問については、阿彌陀という漢字の原音を想定するための音韻學的考察が必要であるが、これはカールグレン(B. Karlgren)が再構した「中古漢語」(Ancient Chinese)によると、ȧ-mjię-dȧ[3]と標記せられるから、amidaを表わしたものと言つてよいであろう。しかし、このうち「陀」については、藤堂明保博士によると[4]、daと標記して差し支えなく、唐代長安語ではtȧと清音化されるようになつたが、それ以前、後漢から東晉の頃に、北方ですでにこのような清音化が起こつていたという確證はないけれど、「佗」にda, tȧの兩音が記錄されている點からみて、「陀」にも古く兩音が存在したという可能性が大きい、と言われる[5]。もしそうであるならば、阿彌陀の原語としては、ȧ-mjię-tȧという標記（カールグレン）も想定され、その限り、それは梵語やパーリ語のamitaをそのまま寫し得るものであつたということが出來よう。

ところで、これは、かつて荻原博士が想定されたところと結果的にはほぼ同じであるけれども、しかしこのような原音をもつて、そのまま阿彌陀の原語と認定されることについては、疑問を持たざるを得ない。何となれば、古い時代の音譯語は、それによつて寫しとられる音が、直ちに梵語なり俗語なりの原語を表わしうるとは限らないからである。例えば、阿彌陀佛の因位の名を「曇摩迦」(大正一二・三〇〇c)と音寫しているのは、梵語Dharmākaraを寫したものでないことが明らかであるが、その原語を俗語とみて、梵語から俗語となる過程、もしくは俗語から漢譯される過程において、その最後のシラブルが略されたのか、あるいは最後の母音が落ちて發音せられたのか、を表わしているものと思われる。このような例は、古譯經ではしばしば見出されるであろう。したがつて阿彌陀という音譯語についても、このような變化が行なわれているのかも知れない。そのように見ることには、一應の根據があると言つてよい。したがつて、もしこれを認めないとすれば、それだけの理由を示さなくてはならない。それには、阿彌陀の原語としてAmidaまたはAmitaという俗語が用いられた實例を發見すれば問題はないであろうが、

古譯經の原本が殘つていない今日では、まず不可能であろう。現在可能なことは、現存諸文獻の中に、これを支持するような證據を見出しうるかどうか、ということである。すでに荻原博士も、前記論文において、漢譯經典の中から、この說を裏づける證據を幾つか指摘されている。しかし、それらは果して承認できるであろうか。

次に、第二の疑問についていうと、Amita が梵語 Amṛta の俗語形であるとすれば、それは如何なる系統の俗語であるか、ということが明らかにされねばならない。しかし、これ亦恐らく困難なことであろう。すでに、ピッシェル (R.Pischel)[6] やガイガー (W. Geiger)[7] が明らかにしているように、梵語母音 ṛ が i に變わるということは、プラークリットに廣く認められる現象であるが、これが amṛta についても適用される例は、一つも指摘されていない。最近、ブラフ (J. Brough) によつて集大成されたガンダーラ語法句經[8]についてみても、amṛta のガンダーラ語は amuda とせられているのみであるから、amita はこの系統の俗語とも思われない。また、コータン語 (Khotanese) の經典及び文書類に阿彌陀佛が言及されている場合があるが、それらは ベイリィ (H. W. Bailey) の校訂本[9]によると、Armyāya, Amitāyur または Amitābau とあるから、ここでも amita と amṛta との結びつきは示唆されない。

もつとも、荻原博士が指摘されている唯一の例であるが、梵語の Amṛtodana (Śuddhodana の弟) に相當するパーリ語が Amitodana となつている場合がある。[10] これによれば、amṛta はパーリ語系の俗語と見做される如くであるが、しかしパーリ語では amṛta は amata で表わすのが常であつて、amita で表わすことはない。それ故、Amitodana を梵語の Amṛtodana の轉訛と見るのには問題があろう。これはむしろ、南傳のパーリ語系と北傳の梵語系との間に生じた傳承の相違と見たほうがよいであろう。南北兩傳の間では、同一の事物に關して、發音上類似の言葉を用いながらも、本來語根を異にし、意味も異なる例が、時として認められるからである。[11]

このように、パーリ語系の俗語と見ることにも問題があるとすれば、現在の段階としては、Amita<Amṛta 說を言語學的に證明し得るだけの條件は、未だととのつていないと見るのが穩當であろう。しからば、この說を裏づけるための方法が他にあるであろうか。これについて、荻原博士は、前記論文において、阿彌陀佛を「不死」または「甘露」の意に解する說があるとして、それを證據に擧げておられる。しかし、それは果して承認できるであろうか。

さて、以上のように見てくると、二つの疑問に共通して殘された問題は、結局、現存文獻において、Amita<Amṛta 說

を支持しうるものがあるかどうか、という點にあるであろう。現存文獻といつても、問題の性質上、漢譯經典が主となるから、これは、シナの譯經史の上からみて、この說が文獻學的に成立しうるかどうか、という問題にしぼられるであろう。そこで、このような視點から、以下に考察を試みることにしたい。

三　「阿彌陀」の原語

シナの譯經史の上で、「阿彌陀」という音譯語が最初に現われるのは、後漢の支婁迦讖譯般舟三昧經（大正一三・八九九a、九〇五a）である。これには一卷本と三卷本とがあるが、「阿彌陀」を用いる點では同じであるから、當面の問題については、いずれをとつても不都合はない。ところで、この經典の梵文は、現在では斷片しか殘つていないので、チベット譯[12]に當たつて調べてみると、「阿彌陀」に相當する語としては、tshe dpag med (Amitāyus), hod dpag med (Amitābha) の二つが用いられている。したがつて、チベット譯による限り、この經典の原本には Amitāyus と Amitābha の兩方が用いられていたということになる。もつとも、チベット譯は、以下にも觸れるように、阿彌陀佛の名に關する限りは、必ずしも、もとの梵語をそのまま寫したものとは思われない點があるし、般舟三昧經の場合でも、主として用いるのは tshe dpag med のほうになつているから、もとの梵文は Amitāyus ばかりであつたのかも知れない。しかし、いずれにせよ、この經典における阿彌陀佛の原語は、Amitāyus か Amitābha であつて、それ以外のものが用いられていたという痕跡は認められない。したがつて、支婁迦讖が譯した原本も、恐らくそうであつたと見るのが自然であろう。ちなみに、異譯の拔陂菩薩經（大正一三・九二二a）と大方等大集經賢護分（同・八七五bc）においても、同じく「阿彌陀」の語を用いているが、これらによつて Amida または Amita の原語を想定することは出來ない。

ところで、支婁迦讖は無量淸淨平等覺經の譯者とせられているが、今日ではすべての學者によつて否定されている。これに對して、この經典の異譯である阿彌陀三耶三佛薩樓佛檀過度人道經〔通稱、大阿彌陀經〕（大正一二・三〇〇a）が、吳の支謙の譯出であるということは、大部分の學者の認めるところであるから、これによれば、淨土經典として「阿彌陀」を用いたのは、この經典に始まるというべきであろう。ところで、この經典には、いうまでもなく梵文とチベット譯があるが、そのいずれにも、阿彌陀佛の原語としては、Amitāyus（ガーターでは Amitāyu）と Amitābha の兩方が用いられており、それ以外の用例は存在しない。梵文では、全體として Amitābha を用いることが多く（Amitāyu (s) は全部で十三回

のみ)、チベット譯では、更にその傾向が強いから(tshe dpag med は全部で九回に減つている。すなわち、梵文とは完全に一致しない)、この經典の原型においては Amitābha を主としていたことが想定せられるが、[13] いずれにせよ、支謙が譯した原本の阿彌陀佛の原語が Amitābha (または Amitāyus) に相當するものであつたことは、これを認めてよいであろう。支謙は、更にその譯出とせられる老女人經(大正一四・九一二b)及び慧印三昧經(大正一五・四六四b)においても、「阿彌陀」を用いているが、兩經のチベット譯[14]を見ると、いずれも tshe dpag med とあるから、原本においては、一應 Amitāyus であつたと見てよいであろう。

譯經史の上からいうと、支謙についで「阿彌陀」の語を用いたのは、西晉の竺法護である。かれの譯出した經典の中で、阿彌陀佛に關說する經典は十三經ほどあるが、そのうち八經[15]において「阿彌陀」を用いていることから窺われるように、かれはこの音譯語を好んで使つたようである。そして、このような傾向は、その後、羅什の譯經において顯著に認められるものであり、かくして「阿彌陀」という語が、シナ佛教において永く、廣く愛好されるに至つた經過については、ここで喋々するまでもないであろう。ところで、この語が用いられている經典について、梵文やチベット譯、あるいは他の異譯があるものを調べてみると、その原語と考えられるものは、ある經典には Amitāyus、ある經典には Amitābha、ある經典にはその兩方であるけれども、しかしそれ以外のものは見出されない。わたくしが調査した限りにおいて、この點について例外は一つも認められなかつた。したがつて、漢譯經典に現われる「阿彌陀」の原語は、Amitāyus または Amitābha に相當するものであつて、それ以外ではない、と言い切つてよいと思う。

ちなみに、阿彌陀佛の音譯語としては「阿彌陀婆」が用いられるが(阿の代りに旃、彌の代りに弭、陀の代りに多・哆・跢・怛・韗、婆の代りに皤なども用いられる)、これは主として唐代以降の陀羅尼經典に認められるもので、Amitābha の譯語であることは言うまでもない。[16]

四　「無量」の原語

「阿彌陀」についで考察されなければならぬ語は「無量」という義譯語である。これは、Amita 說に有力な根據を與えるものとして、荻原博士も取り上げておられるのであるが、果してそのように考えてよいであろうか。

まず「無量」の語を最初に使つた文獻を擧げるとすると、後出阿彌陀佛偈(失譯)(大正一二・三六四b)が指摘せられるが、これを後漢代の譯出とするのは歷代三寶紀卷四(大正四九・五五b)に始まるもので、もちろん信を置くことは出來

ない。この偈の内容は、いわゆる二十四願經にもとづいているから、古い時代のものであることは間違いないけれど、他の異譯本もなく、また梵文・チベット譯も傳えられていないから、果して譯本であるかどうかも疑問である。のみならず、この偈では、ダルマーカラ比丘を單に「法比丘」といつている點からも推察されるように、「無量」という語は、恐らく偈頌であるために、字數に制限されて、かく言われたに過ぎないもので、[17] これをもつて阿彌陀佛の原語を想定することは、甚だ危險といわねばならない。

したがつて、譯經史上「無量」を始めて用いた確實な文獻としては、支謙譯の維摩詰經を擧げねばならぬであろう。この經典に一度現われる「無量」（大正一四・五二九a）が阿彌陀佛を指すことは、羅什譯（同・五四八b）で「阿彌陀佛」、玄奘譯（同・五七四b）で「無量壽」、チベット譯[18]で snaṅ ba mthaḥ yas (Amitābha) となつている點から明らかであるが、同時に、その原語は、玄奘譯とチベット譯とでは相違しているため Amitāyus か Amitābha かのいずれかは決め難いけれど、ともかく Amita でないことだけは明らかといつてよいであろう。支謙は「阿彌陀」の音譯を用いることは前述の如くであるが、そのほかに、次項に述べるように「無量壽」の譯語を用いることはあつても「無量」の語を用いることは、他にはない。ただし、かれの譯出した菩薩生地經（大正一四・八一四c）に現われる「無量壽」は、宋元明三本及び宮內省圖書寮本（舊宋本）によると、「無量」とあるが（同上、脚注）、しかしこれだけでは確かな資料とはいえない。また、かりに「無量」の傳承をとるにしても、この經典のチベット譯[19]では ḥod dpag med となつている點から考えて、その原語を Amita と見ることは困難というべきであろう。

「無量」という語は、支謙に續いて、竺法護の譯經の中にも見出される。すなわち、賢劫經卷六・千佛名號品（大正一四・四六b、四七a）に三度擧げられている「無量佛」が、それである。ところで、この千佛名號品は、いわゆる佛名經の中では最古の形を持つものであり、梁代失譯の現在賢劫千佛名經（同・三七六a）と、一々の佛名を對比することは極めて困難である。ヴェラー（F. Weller）が校訂した梵・藏・漢・蒙・滿合璧の賢劫千佛名經[20]にも、このような作業はなされていない。したがつて、當面の「無量佛」の原語を認定することは、頗るむずかしいことであるが、賢劫經のチベット譯やヴェラー校訂本によつて推定すると、[21] 三度擧げられる中の最初の「無量佛」は、恐らく ḥod dpag med (Tibetan), Amitābha (Weller) に當たるものとみてよいであろう。しからば、竺法護においても阿彌陀佛を「無量」で表わすことがあつたと言つてよいが、しかし、それによつて阿彌陀佛の原語を Amita と見ることは、もとより出來ない。

ところで、今までの諸研究によると、無量清淨平等覺經は竺法護の譯出であると見る說が有力であり、また近年は康僧鎧譯と傳えられる無量壽經をかれの譯出と見る說も提示されているが、この二つの異譯經典の中に「無量」の語が見出されることは、注意に値いする。竺法護がこの二經の譯者であるかどうかは、別の問題であるから、ここでは觸れないが、目下の「無量」の用例についてみると、いわゆる往覲偈の中に、平等覺經（大正一二・二八八ａｂ）では「無量」「無量覺」「無量世尊」、無量壽經（同・二七二ｃ―二七三ａ）では「無量覺」「無量尊」という名をもつて、阿彌陀佛を表わしているのである。これは、荻原博士によつて、Amita 說の有力な根據の一つに數えられているものであるが、果してそのように見てよいであろうか。この往覲偈は、大阿彌陀經には缺いているが、その他の傳本には存在するので、それらの用例を見ると、梵文（『梵藏和英合璧淨土三部經』所收）では Amitāyu (vv. 1, 2, 3, 4, 11, 17,) と Amitaprabha (vv. 5, 20) が用いられ、チベット譯（同上書所收）では tshe dpag med (vv. 2, 4, 11, 17) ḥod dpag med (vv. 1, 3, 5, 20) が用いられ、大寶積經・無量壽如來會（大正一一・九八ａ）、大乘無量壽莊嚴經（大正一二・三二三ｃ）では、ともに「無量壽」のみが用いられている。それ故、これらによつてみれば、「無量」の原語を Amita と見ることは、恐らく不可能であろう。平等覺經及び無量壽經においても「無量」が使われるのは、この往覲偈のみであるという點を考慮に入れると、これはもとの言葉のままに譯されたのではなく、偈頌であるために、このように言われたに過ぎないものであろう。つまり、前記の後出阿彌陀佛偈の場合と同じ事情と考えられるのである。

以上が、譯經史上に現われる「無量」の顯著な例であるが、これによつて、阿彌陀佛の原語を Amita と見る說が支持せられないことは、ほぼ明らかになつたと言つてよいであろう。

五　「無量壽」の原語

荻原博士によると、「無量壽」という義譯語も、Amita ＜ Amṛta 說を支持する根據の一つと考えられている。すなわち「無量壽」は意味の上では不死 amṛta と同じであるから、本來 Amṛta である阿彌陀佛の譯語として「頗る恰當なること」と言われるのである。しかし果して、恰當であろうか。

譯經史の上からみると、「無量壽」を最初に用いたのは、支謙である。かれの譯出した菩薩生地經に、傳承の相違はあるけれど、この語が用いられていることは前述の如くであるが、そのほかに、無量門微密持經（大正一九・六八二ａ）にも、この語が用いられている。この經典の梵文は、今日では斷片しか殘つていないが、漢譯では、右のほかになお東晉から唐代にかけて八譯[22]があり、更にチベット譯[23]もあるから、異本の

數としては不足はない。ところで、それらの異本を見ると、漢譯では「無量壽」または「阿彌陀」、チベット譯では tshe dpag med が用いられているから、この經典における阿彌陀佛の原語は Amitāyus であつたと見てよいであろう。しかならば、支謙は Amitāyus に相當する語を直譯したに過ぎないのであつて、そこに Amṛta という言葉を想定する餘地は全くないと思われる。

支謙に續いて「無量壽」を用いるのは竺法護であるが、更にその後の譯經史を辿つてみると、この譯語が極めて愛好されたことが知られる。それは「阿彌陀」と相並ぶものであつた、といつてよい。[24] ところで、このような「無量壽」の原語を、相當の梵文やチベット譯、あるいは漢譯異本によつて想定してみると、結果はすべて右の場合と同じである。わたくしが調査した限りでは、やはり例外は認められなかつた。もつとも、斷わつておかねばならぬことであるが、「無量壽」は何時の場合も、Amitāyus の譯語であるとは限らない。それは、Amitābha の譯語である場合もしばしばあつたと考えられる。その代表的な經典を擧げるとすれば、康僧鎧（?）譯の無量壽經であろう。すでに津田左右吉博士[25]も論證されているように、無量壽經の梵・藏・漢各異本の用例や敍述の仕方から考えて、その原本において主として用いていたのは Amitābha であつて、それを「無量光」とせずして、Amitāyus の譯語であるべき「無量壽」としたと推測されるからである。何故そうしたのかと言えば、それは「無量壽」という言葉が、神仙說を喜び、長生不死を求めるシナ人の思想にふさわしく感ぜられたからであろう。

このように「無量壽」はシナ的表現と考えられる面があるにしても、これによつて Amṛta を想定することは出來ないのであるが、しかし、譯經史上 Amṛta が阿彌陀佛と關係づけて說かれる例が、他にないわけではない。それは、荻原博士も指摘されているように、陀羅尼經典に現われるもので、例えば拔一切業障根本得生淨土神咒（大正一二・三五一c）では「阿彌利哆」amṛta という語をもつて、阿彌陀佛を讚歎しているのである。[26] この種の陀羅尼は、藏經本として幾種類も傳えられており、[27] またそれに類同する幾つかが、阿彌陀經末尾に附せられて一般に流布したことは、すでに敦煌本において認められるが、年代的にはこれらの殆どすべては、盛唐以降の成立と見做されているばかりでなく、內容からいつても、そこでは阿彌陀佛を Amitābha で表わすのが常で、Amṛta で表わしているわけではない。更に、宋代の陀羅尼經典になると、阿彌陀佛を「甘露大明王」（大正一八・五五三a）とか「金剛甘露身」（大正二〇・九三二b）とか名づける例も認められるが、事情は全く同じである。したがつて、これらは要するに、後世の陀羅尼經典特有の解釋というべきであ

つて、これによつて、阿彌陀の原語が Amṛta に由來するものと見ることは、到底できないのである。

六　「無量清淨」の原語

Amita＜Amṛta 說の直接的根據にはならないけれども、Amitāyus, Amitābha 以外の原語が存在したのではないか、という想定を可能ならしめる譯語として「無量清淨」がある。これは無量清淨平等覺經（大正一二・二七九b）に用いられるものであり、その他には求那跋陀羅譯の老母女六英經（大正一四・九一二c）に一度現われるだけである。平等覺經の譯者については、これを竺法護と見る說が有力であることは前述の如くであり、また一方、白延と見る說も有力なのであるが、いずれにせよ、老母女六英經よりは古いと考えられるから、この譯語の創唱は平等覺經にあるといつてよい。

ところで、この原語が何であつたかは不明である。荻原博士も、その推定を放棄されている。しかし、その後、泉芳璟教授[28]によつて、これは原本の Amita-ābha が Amita-subha と讀まれたためではないか、という推定が立てられている。この推定は、前述の如く、平等覺經などの原本では、もともと Amitābha を主としていたと見る推定と抵觸はしない。しかし、普通「淸淨」と譯される原語は subha / śubha ではなく suddha / śuddha であるし、また老母女六英經のチベット譯[29]を見ると、tshe dpag med となつているから、（他の漢譯二本（大正一四・九一二b、九一三c）では「阿彌陀」）、その原典が果して Amita-subha となつていたかどうかは疑われる。平等覺經によると、全體としては「無量清淨」を用いながらも「阿彌陀佛」が八回（大正一二・二八七b、二八八a、二八九ab、二九三c）も現われ、その中一回は「無量清淨阿彌陀佛」（二九三c）とも言つているから、この語は阿彌陀佛またはその淨土の清淨性を表現しようとしたものかも知れない。いずれにせよ、これによつて、異なつた原語を想定することは出來ないであろう。

七　むすび

阿彌陀佛の義譯語としては、以上に擧げたほかに、よく知られているものとしては「無量光[30]」があり、また、まれには「無量明[31]」というような語も用いられている。しかし、これらは Amitābha の譯と考えられるから、目下の問題としては、取り上げる必要はない。したがつて、以上の考察によつて、阿彌陀佛の原語は、Amitāyus と Amitābha の二つであつて、それ以外には存在しないということを、文獻學的にほぼ確認できた、といつてよいであろう。もちろん、これによつて阿彌陀佛の名義に關するすべての問題が解決できた、というのではない。たとえば、「阿彌陀」という音譯は、こ

の二つの原語のいずれを寫したものか、という問題が殘つている。これについては、先述の如く、いずれかの最後のシラブルが略されたのか、あるいは最後の母音が落ちて發音せられたのか、を表わしたものということが、まず考えられるであろう。かくすれば、Amitāyus と Amitābha のいずれにも適用され得るごとくでもある。最後の母音が落ちて發音せられ（したがつて、その際は最後となる子音にも變化が起き）たのを表わしたものというのは、實は宇井伯壽博士の說を拜借したのであつて、これによつて、博士は、古い時代の音譯語は決して譯者が勝手に略しているのではなく、完全な音譯である、と學者の注意を喚起されている。[32] しからば「阿彌陀」も完全な音譯語であると見なければならぬが、しかしその言語學的根據を示すことは、わたくしには出來かねるので、專門學者の教示を俟つことにしたい。

ところで阿彌陀の原語は Amitāyus と Amitābha である、ということが確認されるとすると、われわれはここに、阿彌陀佛の起源を考えるに當たつての一つの據點を得たことになるであろう。まず、阿彌陀佛の起源をヴィシュヌ神話に求める說は、Amita＜Amṛta 說を通す限りは、成立しないことになるであろう。ここで殘された問題は、Amitāyus と Amitābha とは、別の言葉であり、意味も異にしているにも拘らず、何故に同じ佛を表わす名とされるのであるか、それは始めからのことであるのか、あるいはいずれか一つがまず用いられて、他の一つが後から加えられたのであるか、一體、この二つの原語はどこに由來するものであるか、というような問題であろう。この問題を追究して行けば、當然、阿彌陀佛の起源に關りを持つことになるであろう。本稿の意圖するところは、むしろそういう問題の解明にあるのであるが、すでに紙數が盡きてしまつた。それらについては「阿彌陀佛の起源問題」（宗教研究、近刊）において考察するつもりなので、參照していただきたいと思う。

1　『新佛教』第九卷第九號（明四一）、『荻原雲來文集』（昭一三）所收、二二一―二三〇頁。

2　矢吹慶輝博士『阿彌陀佛の研究』（明四四、增訂改版昭一二）一四頁、望月信亨博士『淨土教の起原及發達』（昭五）四五六頁、西尾京雄教授「阿彌陀佛の名義に就て」宗教研究新八・四（昭六）等。ちなみに、矢吹博士（一〇五頁）、望月博士（四五一頁）は Amita 說に左袒し、西尾教授は Amṛta 說を支持されているが、いずれも荻原博士の所說に含まれるものであるから、ここでは別說しないことにする。なお、最近では中村元博士『淨土三部經下』（昭三九）一九一頁參照。

3　B. Karlgren: Analytic Dictionary of Chinese and Sino-Japanese, Paris, 1923, Nos. 1, 13, 10 11; ditto: Grammata Serica Recensa, Stockholm, 1957, Nos. 1, 359, [4].

4　藤堂博士の御教示による。なお、同博士『漢字の語源研究―

上古漢語の單語家族の研究—』(昭三八) 五三一—二二頁參照。

5 もし「陀」に da, t'a の兩音が存在したとすれば、例えば、後漢代の古譯から廣く使われる「須陀洹」「斯陀含」(道行般若經卷一、大正八・四二九b、出三藏記集卷一、大正五五・五a等) の原語は、パーリ語の sotāpan(na), sa(ka)dāgām(in) に類似したものであつた、と言えよう。しかし、もしその原語がガンダーラ語もしくはそれに近い言語であつたとすれば、このようには言えない。ブラフ教授によつて明らかにされているように、ガンダーラ語では (-t-, -d-)>d の音韻變化を特徴とし (J. Brough: The Gāndhārī Dharmapada, London, 1962, p. 86)、sotaṃ (Skt. śrotaḥ) は sodu というように、濁音化されるからである (Ibid. vv. 9, 10, 171)。ちなみに、ブラフ教授によると、長阿含卷一二、大會經において、梵語・パーリ語の原語では t, th, d, dh, の音であるのに、すべて「陀」(d'a) の音譯を當てている場合が三十五回あるのは (cf. E. Waldschmidt: Bruchstücke buddhistischer Sūtras aus dem zentralasiatischen Sanskritkanon, I, Leipzig, 1932, p.247)、この經典の原本がガンダーラ語の特徴を持つていることを思わせる、という (Ibid. pp. 52-53)。しかし、これは「陀」の音が d'a のみであるとするカールグレンの說を前提としているものであるから、なお檢討の餘地があると思う。

6 R. Pischel: Grammatik der Prakrit-Sprachen, Strassburg, 1900, § 50.

7 W. Geiger: Pāli Literatur und Sprache, 1916, § 12.

8 J. Brough: op. cit., vv. 56 (amudu), 115, 235, 247. なお、M. A. Mehendale: Historical Grammar of Inscriptional Prakrits, Poona, 1948 においても、amuta (p. 150), amata (p. 295) が記錄されているのみである。

9 H. W. Bailey: Khotanese Texts I, Cambridge, 1945, pp. 228–230; ditto: op. cit. IV, 1961, pp. 36, 129—130 (Armyāya); ditto: Khotanese Buddhist Texts, London, 1951, pp. 70, 80 (Amitāyur, Amitābau).

10 Amitodana (Dīpavaṃsa III. 45, X. 6; Mahāvaṃsa II. 20, VIII. 18; DhA IV. p. 124; SnA I. p. 357 etc.); Amṛtodana (Mahāvastu, I. pp. 352, 355, III. p. 177; Avadānaśataka II. p. 111 etc.) 漢譯では普通、「甘露飯」と譯されるから (出典略)、梵文所傳に一致する。ただ注意すべきは佛本行集經卷五 (大正三・六七六a) に「阿彌都檀那、隋言甘露飯」とあることで、これは一見、Amitodana=Amṛtodana を支持するように思われるが、しかし「阿彌都檀那」が果して Amitodana の譯かどうか、疑問である。同經卷一一 (同・七〇一c) に「阿彌多質多囉、隋言甘露味」とあるのも、音譯と意譯とが一致していないから、音譯の信憑性が疑われる。「甘露味」(甘露飯の妹) は、智度論卷三 (大正二五・八三b) にも出てくるが、普通は單に「甘露」といわれるから (大正一・三六四b、大正二四・一〇五a等)、その原語は Amṛtā の如く推定される。しかし、梵語・パーリ語の所傳では Amitā とあるから (Mahāvastu, I. pp. 352, 355; Mahāvaṃsa II. 20)、ここでも傳承の相違が認められる。

11 例えば、「念」(smṛti) の傳統的解釋において、パーリ系で

apilāpana[tā]（<a-√plu 浮動しない）、梵文系で abhilapanatā（<abhi-√lap 明說する）という異なった解釋を與えているが、これは發音が類似している點からして、もともとは同一の解釋であったのが、傳承の相違によって、このように分れるに至ったものと思われる。拙稿「淨土教における行の中心問題—念佛の研究—」（日佛年報、第三十號、昭和三十九年度）參照。

12 The Tibetan Tripitaka (Peking Edition), Vol. 32, p. 104-5-1, 3, 8, p. 105-1-1, 2, 6, 8, p. 105-2-2, p. 107-4-5 (tshe dpag med), p. 105-3-3, 5 (ḥod dpag med).

13 詳しくは拙稿「阿彌陀佛の起源問題」（宗教研究、近刊）參照。

14 The Tibetan Tripitaka, Vol. 33, p. 310-3-3; Vol. 32, p. 66-1-5.

15 出典のみを記す。大正三・一〇七c、同九・二二三b、三七六a、同一二・一五四c、九二五c、同一四・七bc、八a、一〇c、六四c、八六c、同一七・七七二b。

16 Amitāyus の音譯も、まれにではあるが認められる。例えば、「弭跢庾曬」（(a)mitāyuse, Dat.）（無量壽如來觀行供養儀軌、大正一九・七〇b）。

17 この「無量」は多分、平等覺經の「無量淸淨」を略したものであろう。椎尾辨匡博士『佛教經典概說』（昭八）三八八頁。

18 The Tibetan Tripitaka, Vol. 34, p. 90-2-8 (cf. E. Lamotte: L' Enseignement de Vimalakirti, Louvain, 1962, p. 279.).

19 Ibid. Vol. 33, p. 250-1-7, 8.

20 F. Weller: Tausend Buddhanamen des Bhadrakalpa nach einer fünfsprachigen Polyglotte, Leipzig, 1928.

21 The Tibetan Tripitaka, Vol. 27, p. 44-3-8; F. Weller: op. cit. No. 57, pp. 6-7.

22 出典のみを記す。大正一九・六七八c、六八四b、六八七b、六九一a、六九四b、六九七b、七〇一c、七〇六c。

23 The Tibetan Tripitaka, Vol. 11, p. 164-2-5=Vol. 32, p. 227-4-5.

24 龍門石窟の造像記に表われる「無量壽」と「阿彌陀」については、塚本善隆博士『支那佛教史研究北魏篇』（昭一七）五八一頁以下參照。

25 津田博士『シナ佛教の研究』（昭三一）五三頁以下。

26 出典のみを記す。大正一二・三五二a、同一八・八〇一a、同一九・七一b、八〇b、同二一・四六八c等。

27 井ノ口泰淳氏「敦煌本『阿彌陀經』について」（宗教研究一七七、昭三九）參照。

28 泉芳璟氏『梵文無量壽經の研究』（昭一四）、一一三頁。

29 The Tibetan Tripitaka, Vol. 33, p. 310-3-3.

30 「無量光」が明確に阿彌陀佛を指すものとして用いられるのは、無量壽經卷上（大正一二・二七〇a）に一度現われるのが、恐らく最も古いであろう。しかし、主として用いられるようになったのは、玄奘以降である。

31 現在賢劫千佛名經（大一四・三七六b、三八三c）の「無量明」は Amitābha に比定せられる（F. Weller: loc. cit.）。ちなみに、十住毘婆沙論卷五、易行品（大正二六・四一b）の「無量明」は Amitābha ではない。

32 宇井博士『大乘佛典の研究』（昭三八）八一二—八三〇頁。